

目的 イラクサは古代以来、山村に住む人々の衣料原料として用いられてきたことは文献によって知られている。私達は標題の研究オタ報に続けて更に調査地域を拡大し利用の実態をより明らかにすることを目的として調査・研究したので報告する。

方法 文献記載地類似の地区を選定し、あらかじめ設定した調査項目にしたがって、古老(なるべく女性)から聞き取り調査を行った。

結果 前報までの調査において入手することのできた文献については実地に跡付けを行ったので、今回は類似の地区として山形・福島・新潟3県の4市4町3村から17地区を選定して調査を行った。調査地の殆んどが食用として利用され、繊維利用を確認できたのは3地区、すなわち山形県西田川郡温海町奥川、同じく朝日村大鳥、小国町折戸をいずれも朝日山地の麓の小集落であった。茅に積み織って布にしたのは奥川・大鳥、茅を細繩にして利用したのが折戸である。また大鳥では「苧ぐそ」にして出産時の衛生材料として用いたとのことであった。このような利用法はこれまでの調査で聞くことがなかった初出の方法であった。またイラクサの呼称分布が前報より更に明らかになった。山形県奥羽山脈沿いに朝日村東部および宮城県境に接する福島県北部が「アイコ」、山形県西海岸および朝日村西北部が「アイタケ」・「イエタケ」・「エタケ」、山形県米沢市に接する福島県側が「イラクコ」であった。これらの呼称分布とイラクサの繊維利用との関係は特に認めべき傾向・差異はなかったが興味深い結果と思われる。